キュポ・ラ

旧国鉄貨物線跡地などを再開発した川口駅東口の新たなランドマークの一つです。８階には、川口市立川口駅前保育園があり、７階のメディアセブンでは、楽しく体験できる映像コンテンツや８Ｋテレビの視聴コーナーなどを常設しています。様々なワークショップや定期的な教室も開催しております。５・６階には川口市立中央図書館があります。蔵書数約 55 万冊、閲覧席約 480 席を誇る県内最大級の大規模な図書館です。そして、同じく５階には、川口市観光物産協会があり、市内のルートマップ全種は勿論のこと、その他の観光情報やイベント情報などを取り揃えております。隣にはカフェが併設されておりますので、観光プランを練ってみてはいかがでしょうか。また、ペーゴマなど一部市内の推奨土産品を２階観光物産案内で販売しております。是非ともお立ち寄りください。

メディアセブン

川口市立中央図書館

川口市観光物産協会

2F 観光物産案内

川口市の名産品展示

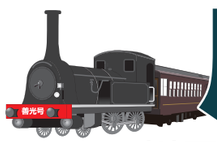
川口市観光物産協会HP

川口市周辺アクセス図

主要駅から川口駅までの所要時間
- 東京駅から約23分
- 池袋駅から約17分
- 大宮駅から約20分

川口市経済部産業振興課
〒332-8601 川口青木2-1-1
電話：048-259-9018 FAX：048-258-1161

2023.7



川口駅東口コース

川口発祥の地へようこそ！　ハイテク都市にひそむ歴史

人口60万人を超え、勢いづく川口市の中心部が川口駅周辺です。駅前に広がる巨大なペデストリアンデッキから出発し川口神社へ。現在、南中学校が建っている荒川のスーパー堤防のあたりは、600年前の文献に「こかはぐち」(小さい河口という意味)として登場しています。徳川将軍が日光に参るときに通る御成街道には、川口宿のにぎわいを思い起こさせるような古い商家が残ります。大奥最後の御年寄瀧山の墓なども現存しています。再開発のビル群から目と鼻の先にあるリアル史跡。息づく歴史に心躍ります。

A-1 JR 川口駅

明治43年(1910年)に川口町駅として開業。昭和61年(1986年)までは貨物駅もありました。1日の平均乗客数は約6.5万人と、大宮駅、浦和駅に次いで3番目。重厚な駅名看板は鋳物製で、上野-熊谷間を走行した初の機関車「善光号」があしらわれています。

B-2 川口神社

川口市の総鎮守。平安時代の天慶年間(938-947年)に大宮氷川神社より勧請し、古来より信仰をあつめたといわれています。享保18年(1733年)の銘が残る神鏡は市指定文化財となっています。12月には大歳祭(おかめ市)でにぎわいます。

C-3 川口の渡し・鎌倉橋(かまくらばし)の碑

現川口市舟戸町と現北区岩淵を結んだ渡し。源義経が奥州平泉から鎌倉へ馳せ参じた時にはことを通ったと考えられています。かつての存在を記念して「鎌倉橋の碑」が本町1丁目の荒川堤防近くに建てられています。

B-3 錫杖寺(しゃくじょうじ)

錫杖寺は真言宗智山派の寺院です。
江戸幕府2代将軍・秀忠が日光参拝の途中、錫杖寺を休憩所と定めて以来これが吉例となり徳川家と深い関わりを持つことになります。本堂・屋根瓦・灯籠などに「葵の御紋」を見ることができます。江戸城大奥最後の御年寄・瀧山が眠る墓が、本堂裏手の墓地にあります。

A-3 鯉のぼり

川口元郷駅周辺を拠点とする「本栄商店街振興組合」が、毎年４月中旬から５月上旬にかけ、川口元郷駅近くの芝川さくら橋にて、「鯉のぼり祭り」を開催しています。近隣保育園に通う園児の皆さんが手形・足形スタンプで鯉の鱗をデザインするなど、個性溢れる様々な鯉のぼりが大空を泳ぐ様は圧巻です。

C-2 善光寺(ぜんこうじ)

長野の善光寺と同様に阿弥陀三尊像が安置されていたことから、江戸庶民の信仰をあつめました。安藤広重の「江戸百景めぐり」に登場する「川口のわたし善光寺」は向こう岸から描かれた絵として有名です。(写真は「川口のわたし善光寺」(安藤広重画))

B-3 文化財センター

市内の文化財を展示しています。
発掘調査の出土品や鋳物に関する資料、獅子舞などの民俗芸能に使う道具などが見学できるほか、体験学習も行われています。9:30～16:30(入館16:00まで)、月曜(祝日の場合は翌日)、年末年始休。一般100円、小中学生50円

A-2 樹(じゅ)モール

川口駅東口の活気あふれる目抜き通り。地場産業である植木と鋳物を街づくりに取り入れ、ところどころにベンチやユニークな彫像が置かれています。
電線を地中化しており、空間が広く感じられる点も特徴です。令和5年には地上２８階・地下２階建て複合施設内に「樹モールプラザ」がオープン。敷地内を貫通する通路を設けることで、地域のかたが行き交った歴史を継承する、歩行空間に配慮した施設です。

海を渡った川口大砲 ~ 幕末の鋳物技術

コース途中の本一通りから東に進むと、大きな大砲が展示されているのが見えます。これは幕末の嘉永5年(1852年)、津軽藩の依頼を受けた川口の鋳物師・増田安次郎が、幕府の砲術指南役を務めた高島秋帆と協力して作り上げたレプリカ になります。全長3.5メートル、口径15センチ、重さ3トン、射程距離はなんと2,500メートル。

当時の日本では不可能といわれた大砲の製作を可能にしたのは,川口鋳物の高い技術力があったからです。

19世紀に入ると、日本の近海には外国船が来航し、開国を強く迫ってきました。攻め込まれるのではないか、と脅威に感じた幕府は文政8年(1825年)に「異国船打払令」を出し、弘化元年(1844年)には江戸の台場など各所に砲台を据え、外国船を警戒するようになりました。

そんな時代状況のなか川口の鋳物師は西洋式の大砲について研究を重ね、独自に大砲を鋳造。安政6年(1859年)にはその一人である増田安次郎に対し、高島秋帆が大砲づくりの功績をたたえた褒状が出されています。この「高島秋帆褒状」と、幕府と工場との連絡や銃砲や砲弾の製造数を記録した「増田家鋳造関係古文書」は、市指定文化財となっています。安次郎が幕末期の5年間に製造した213門の大砲と4万1,323発の砲弾は、全国各地に配備されました。それまで鍋、釜などの日用品が主だった川口鋳物が、武器の鋳造も行うようになったのは、まさに時代の流れといえます。

これらの大砲は日本には現存していませんが、最近になって、当時のものがフランスのパリにあることが判明しました。この大砲は文久3年(1863年)に長州藩が下関海峡でアメリカ、フランス、オランダの船を砲撃した下関戦争の際、敗れた長州藩から戦利品として持ち去られたもの。うち1門がアンバリッド軍事博物館に残っていました。前庭に展示されている大砲のひとつに「十八封度砲　嘉永七年春於江都葛飾別処聖鋳之」という銘が、長州藩の家紋とともに印されています。川口産の鋳物製大砲は、遠い異国の地で、歴史を伝え続けています。

C-3幕末に作られた大砲のレプリカ(増幸産業)

最新鋭
ときどきレトロ川口の
魅力盛りだくさん

川口駅東口コース

No.1

川口市マスコット「きゅぽらん」

川口市内観光ルートマップ

A-2 キューポラオブジェ

A-2 働く喜び像

A-1 川口駅銘板

B-3 文化財センター

A-2 JR川口駅前